

地デジ開始10年とテレビ視聴行動の変化

～データ放送・EPG・マルチスクリーン利用～

地上デジタル放送は、2003年12月の開始から間もなく10周年を迎えようとしている。10年が経過するなかで、初期のころに地デジに抱いた視聴イメージが大きく変わってきたことにあらためて気づくこともある。今回は、地デジの番組視聴から派生する「関連行動」の広がりについて、最近の調査データからトピックを紹介したい。

文●美和 晃 *Miwa Akira*
電通総研
メディアイノベーション研究部 研究主幹

大きく利用者層を広げてきた データ放送

地デジ放送開始当初に筆者の周囲で地デジテレビを購入した、いわゆる「高関心層」の方々から多く聞かれた声は「売り文句とは違い、dボタンを押しても番組の関連情報は出てこない」とか、「たまに大型の企画番組でdボタンから投票に誘導する視聴者参加番組があるけれど、テレビをネットにつないでいないので肝心の投票はできない」……などであった。実は、高関心層の方々の間では、このイメージを

その後10年持ち続けている人も多い。

〔図表1〕は、電通総研が実施した調査から「普段よく利用するテレビの機能」について尋ねたものである。地デジのデータ放送の利用が44%に上り、かなり浸透してきていることがうかがえる。

また、〔図表2〕は、調査対象日時である3月6日の20時台のデータ放送利用率について、EPG(電子番組表)の利用と合わせて15分ごとに尋ねた結果である。なお、調査対象日は、TBS系列でワールド・ベースボール・クラシックの第1ラウンド(日本対キューバ戦)を生中継していたほかは、通常の番組編成ないし通常

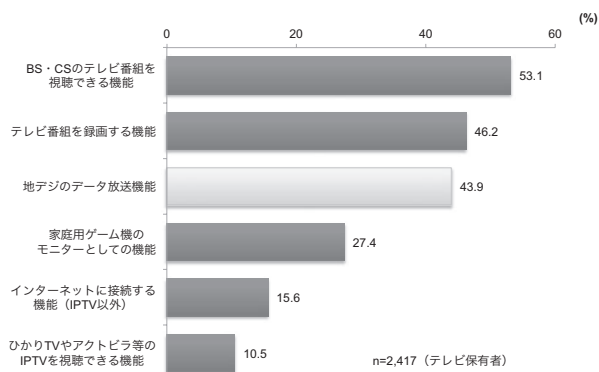
番組の拡大版を放送していた日である。

これを見ると、どの時間帯でも、テレビを視聴していた人の16～20%の人がデータ放送を利用したと回答している。詳しく紹介する紙幅はないが、20時台平均で見ると、視聴していた放送局によらずおよそ16～17%の人がデータ放送を利用していた。

各局の視聴者の間でデータ放送の利用率が大きく異なることを考え合わせると、いまやデータ放送がごく日常的・習慣的に、視聴番組にかかわらず幅広く利用されていることをうかがわせる結果となった。

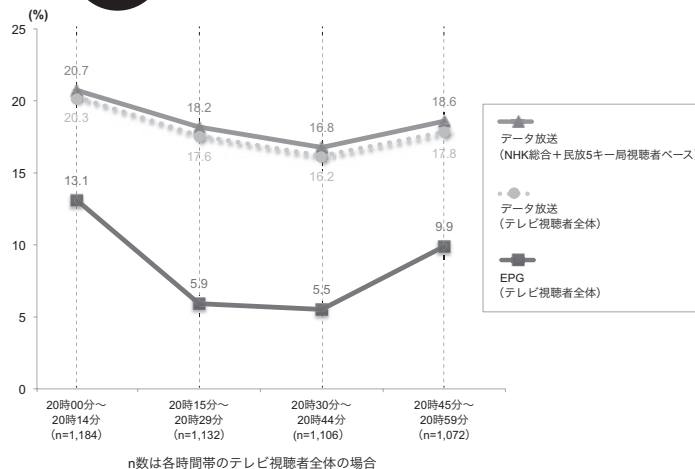
このように、地デジがアナログ停波を

図表1 普段よく利用するテレビの機能



※設問文の中の「データ放送機能」
リモコンのdボタンを押すと文字や画像情報を表示する機能を指します。

図表2 データ放送・EPGの利用



果たし、間もなく放送開始10年を迎えようとするなかで、進化したテレビの見方を受け入れる人々が、ゆっくりとだが着実に増えてきた、と言えるだろう。

双方向のネット利用は スマホ・タブレットへ

他方、[図表1]にもう一度注目してみると、テレビのインターネットへの接続率(IPTV除く)はネットユーザーの間でさえ15%程度に留まっている。データ放送利用者の多くは、テレビそのものを經由して双方向でやり取りするよりは、番組視聴を補完する情報を受動的に受け取ることが好んでいると思われる。

そして、双方向性の今後の受け皿は、テレビ本体よりは視聴者の手元の各種ネット端末が主軸になると考えられる。ここではスマートフォンやタブレット端末を利用する「マルチスクリーン」型視聴について触れてみたい。

実は、本誌2013年3月号の当コラム「マルチスクリーン時代に向けて再び考える“ながら視聴”」においても、テレビ視聴者がネット端末を利用して番組やCMに関連するネット利用行動を起こしている実態を報告した。今回は、その半年後に実

施した調査から、テレビ視聴と同時に利用される端末の特徴について紹介したい。

[図表3]は、3月6日の20時台にインターネットを利用していた人を取り上げ、利用端末の割合の大きさを示したものである。分析対象者は、PC(デスクトップ型ないしノート型)に加え、スマートフォン、タブレット端末を含む3種類の端末の全てを保有する先進利用者層である。

図表では20時台のネット利用者を以下の3種類に分類した。①ネット利用者全体、②そのうち、同時刻にテレビも視聴した人、③さらに、そのうちテレビの視聴と関連する目的でネットを利用した人、の3種類である。

まず、①ネット利用者全体を見ると、デスクトップPCが34.5%、ノートPCが36.2%を占める一方、スマートフォンやタブレット端末の利用はかなり少ない(それぞれ19.0%、16.8%)。

続いて、そのうち、同時刻にテレビも視聴した人(②)を見ると、デスクトップPCの利用は26.1%に下がり、代わりにスマートフォンの利用が24.4%、タブレット端末の利用が20.9%と大きい。つまり、スマートフォンやタブレット端末を用いたネット利用は、テレビ視聴との共存を許容する度合いがPC(特にデスクトップ

PC)よりも高いと言える。

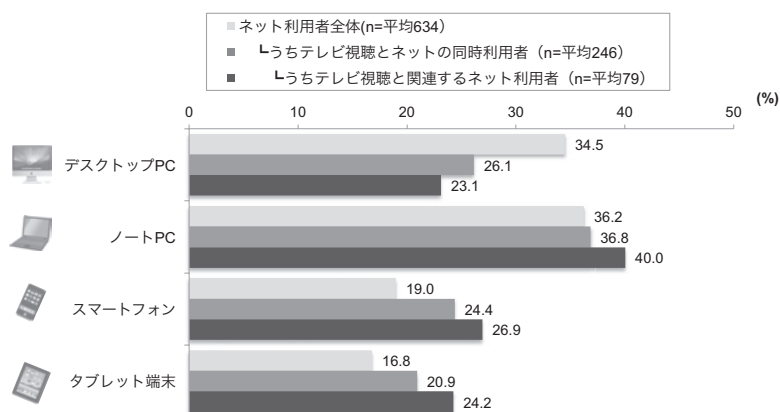
さらに、②のうち、テレビの視聴と関連する目的でネットを利用した人(③)を見ると、スマートフォンやタブレット端末の利用がさらに高まり、デスクトップPCの利用を逆転している。テレビ視聴と関連するネット利用行動にとってスマートフォンやタブレット端末はPCよりも高い親和性を示していることがうかがえる。

このデータは、スマートフォンやタブレット端末が今後さらに普及を遂げると、テレビ視聴中のネット利用、とりわけテレビ視聴と関連するネット行動が促進される可能性があることも示唆している。

10年単位で進化を見据える 必要性

地デジ開始後10年目をかけてデータ放送の利用が幅広く定着したことからわかる通り、テレビ視聴と関連した派生行動が進化するためには、目安として10年程度の長期の視点が求められることがわかる。現在、注目されている「セカンドスクリーン」「マルチスクリーン」サービスについても、視聴行動の長期進化に立脚した地道な育成の観点が不可欠になってくるように思われる。

図表 3 ネット利用端末 (20時台平均)



電通総研 第2回マルチスクリーン調査概要

- 調査手法 ウェブ調査
- 対象者条件
 - ・分析対象 スマートフォン・タブレット端末両方の保有者2,485人
 - ・年齢 15歳(中学生を除く)~49歳男女
 - ・居住地 一都三県(直近の質問紙調査の結果から上記条件で性別・年齢構成に応じて割付)
- 日時 2013年3月6日(水)
- 時刻 20:00~21:00(左記時刻に常時在宅であった人)